



ブバルディアの東京オリジナル品種の開発 ～華やかな八重咲き 3 品種が誕生！～

ブバルディアは伊豆大島の特産切り花です。温暖な気候を活かし一年を通して生産されており、東京市場ではシェア第 1 位を誇ります。この特産品のさらなる生産拡大とブランド化に向け、農総研では東京オリジナル品種の開発に取り組んでいます。

これまでに、育種素材を収集・評価し、育種手法を確立して多くの新系統を作出しました。これらを東京都島しょ農林水産総合センターや生産者の協力のもと、伊豆大島で栽培評価を行い、花の色や形、生育が優れる有望系統の選抜を進めました。2019 年には第 1 期として一重咲きの「東京スター」シリーズ 3 品種を育成しました。そしてこの度、第 2 期の「東京ダブルスター」シリーズ 3 品種（図 1）の育成を完了し、農林水産省に品種登録出願しました（2021 年 9 月出願公表）。

この 3 品種は華やかな八重咲きでボリューム感があり、その品質は現在主流の海外品種に匹敵します。また、伊豆大島で栽培しやすく、高い収量が見込まれます。3 品種の本格的な普及に向けて、今年度から伊豆大島で試験栽培がスタートしています。

今後は、第 3 期以降の新品種（図 2）も順次育成し、最終的には花の色や形などでバラエティのある 10 品種程度のシリーズとする予定です。（園芸技術科 植物バイテク研究チーム）



図 2 第 3 期以降の新品種候補

図 1 第 2 期 3 品種のブバルディア「東京ダブルスター」シリーズ

東京都産無花粉スギ「心晴れ不稔1号・2号」が認定されました

東京都内の多くの皆さんが花粉症に悩んでいます。その対応策の一つとして、農総研では花粉の出ない無花粉スギの育成を進めています。他県で発見された無花粉の遺伝子をもつ個体と東京都精英樹を交配し、東京の気候に合った無花粉スギを作出します。候補の中から、生長性や材質等に優れた2個体を選抜しました。この選抜された個体は、国の林木育種センターにおける優良品種・技術評議会において認められ、「心晴れ不稔1号」（図1）及び「心晴れ不稔2号」（図2）が認定されました。（緑化森林科 森林研究チーム）



図1「心晴れ不稔1号」 図2「心晴れ不稔2号」

ウドの“芽”^{めざ}覚めやすさは品種によって違います

軟化ウドは、江戸時代から栽培されている多摩地区の特産品です。ウドは寒い時期には枯れないように、新芽が深く眠って伸びなくなる性質（休眠性）があり、冬の寒さを経験すると、段々芽が目覚めて伸びやすくなります。一年の中で特に芽が伸びにくい11～12月中旬の間、従来の品種では安定した生産ができませんでした。農総研では現在、この時期に芽が伸びやすく（弱休眠性）、安定して生産できる新品种の開発試験に取り組んでいます（図1）。試験ではまず、一般的なウドの芽の伸びにくさを知るため、農総研にある遺伝資源のウド7品種を調査しました。芽が一番伸びにくい時期に根株を冷蔵したり、芽を伸ばす植物ホルモンを処理したりしました。その結果、処理によって芽が伸びた程度の違いから、7品種の芽の伸びにくさは大きく4つの



図1 ウドの芽の伸びにくさ
伸びにくい性質の品種（左）は茎が短く、傷みやすい。
右は現在開発中の芽が伸びやすい新系統。

タイプに分類できると考えられました（表1）。この成果は今後、年内どりができる新品种の開発に活用していきます。

（園芸技術科 植物バイテク研究チーム）

表1 処理によってウドが伸びた程度とめの伸びにくさの評価

分類	冷蔵	ホルモン	芽の伸びにくさ評価
1	少し伸びる	少し伸びる	伸びにくい
2	とても伸びる	やや伸びる	やや伸びにくい
3	とても伸びる	とても伸びる	やや伸びやすい
4	処理しなくても伸びる		伸びやすい

卒業シーズンを彩る花きを選定しました

2～3月の早春期は卒業シーズンと重なり、花の需要が伸びる時期になります。しかし、現在都内で生産されている品目・品種には早春に開花するものが殆どありません。このため、中・晩春に開花する花などを暖房を使って栽培することで出荷に間に合わせていますが、これでは燃料費が大きな負担になってしまいます。そこで、冬の寒さに強い多年性花き（図1）を栽培し、燃料



図1 冬の寒さに強い多年生花き

料費を抑えた栽培環境でも早春に開花する花きを選定しました。104品種を無加温の露地ベンチ栽培と5℃加温のハウス栽培を行ったと



図2 早春でも花数の多いオブリエチア

ころ、58品種がハウスで早春期に開花し、そのうち、露地でも早春に開花したのは33品種でした。花の形や花数の点から観賞性を評価して、最終的にはオブリエチア（図2）をはじめとする30品種を有望品種としました。

（園芸技術科 花き研究チーム）

江戸東京野菜の「城南小松菜」と「芯とり菜」

「城南小松菜」は、昭和46年に世田谷区など東京都城南地域におけるコマツナの産地形成を目的として、地元で自家採種されていた種子43系統を集め、品種審査会を通して選抜された品種です。早晩性は早生で葉柄は細長く、淡緑色で丸い葉っぱが特徴で、秋と春が旬になります。

芯とり菜は“芯を食べる菜”が名前の由来で、築地市場で呼ばれ始めたと言われています。初めは「唐人菜」、「ちりめん白菜」等を“芯とり菜”として出荷していましたが、その後



図1「城南小松菜」



図2「ごせき芯とり菜」

「ごせき芯とり菜」が育成されました。現在は、市場出荷には貯蔵性の良い「早生大阪白菜」が用いられていますが、「ごせき芯とり菜」も秋から冬にかけて、北多摩地域の一部の直売所に並ぶようになりました。

どちらもクセがなく、食味・食感がとても良好です。昔懐かしい“菜っ葉”をぜひ、味わってみては如何でしょうか。

（江戸川分場）

肌がきれいで揃いの良い秋まきコカブを紹介します

～第 63 回野菜・花き種苗改善審査会～

都内のカブの令和 2 年産収穫量は約 1,800 トンで、根菜類としてはダイコン、ニンジン、サトイモに次いでいます。都道府県ランキングでは 14 位と健闘しています。都内では、4～6 月に収穫する「春まき栽培」と 10～12 月に収穫する「秋まき栽培」が代表作型です。ここでは、11 月 15 日に開催された第 63 回野菜・花き種苗改善審査会「『秋まきコカブ』の部」の概要をご紹介します。品種は都内の種苗会社 4 社から 11 点、参考出品として都外 1 社から 1 点、計 12 点が出品され、播種は 9 月 22 日に行いました。審査会では、球の大きさや形の揃い、肌の白さや艶、球と葉の大きさのバランスなどが評価のポイントになりました。その結果、Ⅰ等に「武蔵野交配 MS-1306」（武蔵野種苗園）（図 1）、Ⅱ等に「武蔵野交配 MS-1346」（武蔵野種苗園）と「ノウリン交配 きらりのゆめ」（日本農林社）、Ⅲ等に「カネコ交配 ゆきわらし」（カネコ種苗）が入りました。入賞品種 4 点のうち 2 点が新品種でした。



図 1 Ⅰ等 新品種「武蔵野交配 MS-1306」（武蔵野種苗園）

（園芸技術科 野菜研究チーム）

農総研が所蔵する細密画から昔の研究を知る ～第 3 回～



図 1 「練馬大根」

根部正面図、断面図及び葉

ダイコンの試験が初めて記録されたのは明治 35（1902）年で、その翌年には「練馬大根」、「桜島大根」、「方領大根」など数品種を扱った品種比較試験も行われました。当時、ダイコンの主な用途は沢庵用で、「練馬大根」は適した品種でした。根部の先端部（尻部）が細長く尖る形状と丸くなる形状の 2 種類の系統に大別され、沢庵用には細長くて尻部が尖る系統が使われ東京府で広く栽培されていました。図 1 にご紹介する細密画は「練馬大根」の細長く尖る系統の一つであり、細密画の中では大長と記されています。

（研究企画室）



HP 版細密画の
紹介はこちら



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1

TEL: 042-528-5216

<https://www.tokyo-aff.or.jp/site/center/>

Twitter: @tokyo_tdfaff

こちらの QR コード
からご覧ください

